せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第九十八号（毎月一日発行）
平成九年十一月一日

年表で読む古平の歴史《5》

■フルビラ以外にも場所を請負う

岡田家は、フルビラと合わせてオタルナイ（小樽内）のほか岩内・積丹場所も請負っていましたが、請負人の名義は恵比須屋（岡田家）の屋号でした。

岡田家五代目の弥三右衛門秀悦が、恵比須神社（現在の厳島神社）を創建してから九十余年後の天保十五年（一八四四）、古平場所の支配人であった城川長次郎が、恵比須神社に御影石の灯籠一対を寄進していますが、翌年にはさらに御影石の鳥居を寄進しています。

■余市・古平山道を開く

弘化二年（一八四五）、余市の林長左衛門が余市運上家から海岸に沿い、谷を縫いながらユナイ峠までの山道を切り開きました。

ユナイから古平領、現在の沖町へは山の急斜面を登る小道があって、車馬の通行が出来るようになったのは明治になってからのことでした。

■「二八取り」の漁民

西蝦夷地の漁業は春の鰊漁が中心でした。松前地である道南の海岸でもかなりの鰊漁がありましたが、天明年代（一七八一）の頃から江差地方の鰊漁が不漁になり、それからも凶漁が続きました。

そこで漁民たちは、それまで出漁できなかった西蝦夷地の瀬棚・島牧・寿都・歌棄方面にまで出漁するようになりました。そして、漁民は出漁した場所の場所請負人に対して、入漁料として寿都より北では漁獲高の二割、瀬棚より南では一割を納めて残りが自分の取り分となります。これが「二八取り」です。

その後、二八取りの漁夫たちは規制が緩和されて、石狩・厚田・増毛以北までも許可されるようになりました。

これには東北地方が凶作で多くの農民が道南に移ってきたことや、津軽・南部からの漁夫の進出があり、二八取りで儲けをたくらむ場所請負人が出漁を歓迎したということなどがあります。

二八取りの漁夫は刺網と生活用具を川崎船に積んで来て、番屋を借りて漁をするというのがほとんどでしたが、中には建網を持っていて、漁夫を雇って漁をする者もいました。また資本のある者は、自分で船を持って漁獲物を運んだり、生活用具や漁具を売るほか、漁獲物の売買などの商売をする者も出てきました。

■利益を増やした請負人

この「二八取り」は、やがて場所請負人たちに莫大な利益をもたらすことになったのです。

まず出漁して来た漁夫たちは差し当たっての生活必需品として、生活用品や食料品を請負人から前借りします。そしてその代金は、切り上げの時に漁獲物の代金から差し引かれることになりますが、前借りした食料品などの値段は高くし、買い入れる漁獲物は品質を厳しく吟味して買いたたきます。

また請負人も自分で建網を経営していて、漁夫や土地のアイヌの人たちを安い賃金で使い、持ち船である北前船を使って日本海沿岸や関西地方と取引をしていました。

場所請け負いのはじめはアイヌの人たちとの交易だけでしたが、藩の財政難から請負人からの献上する金額も増え、そのために次第に漁場経営の方に力が移っていくことにもなったのです。古平も漁場としては発展しましたが、使われている人たちの苦労は大変だったようです。

わが町ふるびら【3】

本間銀朔

昭和四十三年（一九六八）は開町百年に当たることから、盛大な記念式典と、旗行列などの祝賀行事も全町民が参加して賑やかに行われたほか、各戸に記念品が贈られました。この時に古平町旗も制定されました。

昭和四十七年には古平小学校跡地に、鉄筋コンクリート一部鉄骨三階建ての文化会館が一億四千万円で竣工しましたが、行事や諸団体の会合などに有効に利用されています。

昭和四十八年四月、五選を果たした町長伊藤由松さんが札幌市立病院で逝去されました。行年六十七歳で、町民からも大変惜しまれ、故人の功績に対して古平町から名誉町民の称号が贈られました。（古平町名誉町民第一号です）

昭和五十一年十一月、港町海浜埋立地に鉄筋コンクリート二階建、工事費七千三百万円で漁港会館が建設され、西部方面での集会などに広く使用されています。

昭和六十一年、浜町の元㊥本間酒造株式会社（銘酒線爛醸造元）の跡地に六千七百万円で武道館を建設し、剣道・柔道と青少年の健全育成に利用されていますが、さらに今後も活躍する選手の出ることが大いに期待されています。

旧古平中学校は、中島グランド脇に昭和二十七年六月に新築されましたが、それからすでに四十年以上も経過して老朽化したため、平成五年に新校舎の建設に着工し、平成七年、鉄筋コンクリート三階建、工事費その他で十六億八千七百万円でモダンな校舎が竣工しました。事前の見学をしましたが、これからの教育はいい環境で学ぶことが必要で、生徒にとっても大きな喜びであったと思います。ちなみに現在の生徒数は百七十二名とのことです。

平成五年十二月、北後志消防組合古平支署庁舎が、二億七千五百万円で落成しました。浜町恵比須神社の側にありました旧消防第一分団詰所から新庁舎に移りましたが、近代的設備をもった庁舎が出来たことにより、町民の生命や財産を守ってもらえることに心強いものを感じています。

平成六年十一月、古平郵便局の新局舎が古平漁業協同組合の筋向かいに新築されましたが、大変モダンな建物で入船町の町並みも一段と良くなったようです。また、内部のロビーも催し物の会場などに使われていて、町民にとっては官庁と思われない親しみのある郵便局と好感をもたれています。これで、私の知っている郵便局の移り変りは三軒目となりました。

――つづく――

（古平町大字丸山町 在住）

お詫びと訂正

先月号で―女性の出稼ぎ―カニの缶詰工場の竹内コトさんの名前がおちていました。

渡辺ハツエ

ミニ菜園明日の予定を組んで寝る

背の長けし孫の電話は他人めき

老いてなお猫追っ払うたくましさ

―稲倉石の思い出―

山奥の診療所に新進の医師を常駐

〔3〕

富山市 高橋 藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

山奥で、辺避で、六〇〇人足らずの住人で、娯楽もない人里離れた稲倉石に、有名な大学病院のお医者さんが常駐していたと言っても信じてくれないかも知れませんが、あったのです。

稲倉石鉱山は鉄の精製に必要なマンガン鉱石を探して、山の奥深くまで掘り進み、実に、総延長で一〇〇キロメートル余も掘ったのです。

身近かにいえば浜町のバス停から稲倉石の間を、八本もトンネルを掘ったことになります。

鉱山は非常に危険なところと云われていましたが、幸いな事に稲倉石鉱山はガスの発生・噴出のない山でしたから、ガス爆発などの危険のない山でした。

でも会社は常に

「安全第一・人命尊重」

を、いの一番に掲げておりましたので、災害は極めて少なく全国鉱山保安表彰をはじめ多くの表彰を受けておりました。

一方、万一の事故や怪我の備えと、住民（社員の家族）の疾病の予防・治療を兼ねた診療所を開設し、診察室・手術室・入院室・レントゲン室・歯科機器などを備え、医師・事務員・看護婦を常駐させていました。

採算的には大赤字の連続でしたが、会社は終始

「鉱山の発展は、会社も社員も家族も心をひとつにして援け あい、健康で幸せになる事」

すなわち

「全山一家」

の精神を貫き、鉱山が不振の時でも、医療部門だけは採算・損得を抜きにし、常に前向きの姿勢で対応しておりました。

しかし、会社の方針とは裏腹に、医師の常駐には悩まされていたようです。

好条件・厚待遇で接しても山間僻地での勤務は敬遠され、長く滞在する医師は少なく、鉱山管理者の悩みの種となっていたようです。

そんなおり、当時、先端医療機関のひとつとして注目されていた、札幌医大の胸部外科からの医師派遣がまとまり、短期交代派遣ながらようやく安定した診療運営がなされ、会社も住民も安堵の生活を送ることができました。

私が稲倉石に赴任したのはちょうどその頃で、若い新進の医師が社員の健康診断や住民の疾病にとりくみ、山の生活に溶けこんで頑張っておりました。

それまで盲腸になると、古平や小樽の病院で手術を受けていたのですが、この診療所で行うようになり住民から大変感謝されていました。

一時、医大の都合によって派遣が中断となった時があり、止むなく後任の医師を探したのですが、僻地がネックとなって二の足を踏む方ばかりでした。

八方に手を回した結果、釧路に高令の内科医が勤務医を希望しているとの情報が入り、当時の所長さんより

「一日たりとも無医師には出来ないので、条件は一切任せるから、急いで本人に会いその場で契約するように」

との指示を受け、丘珠から釧路へバタバタ機で飛んで行き契約を交わした事もありました。

このように会社が「医師の確保」に奔走され、社員と家族の健康に意を注いでいるのが実感されました。

札幌医大からの医師派遣が再開されたときは、心底からほッとしたものでした。

むかし懐かしい うすかわ

竹内コト

昔はよくお世話になっていたのに、今はまったく見ることもなくなってしまったものに『うすかわ』があります。『経木』というのがその名前で、スギやヒノキの材を薄くけずったものですが、一般には『うすかわ』でとおっています。

お菓子や食料品を買うとこれに包んでくれますし、小さく切ってまんじゅうやべこ餅、おだんごなどがくっつかないようにはりつけたり、おにぎりを包むのもこのうすかわでした。

うすかわで一番思い出すのは、昔はお通夜があると、お参りの人に香典返しとして赤飯をつかいました。母がその赤飯をいただいて来ると子供たちに分けてくれます。うすかわに付いている米粒もていねいにとっている母の手元を見ながら、ジーッと赤飯を分けてくれるのを待っていたものでした。うすかわの木の香りが食欲をそそうように思いました。

私は学校を卒業すると間もなく、札幌の大きな会社を経営している家にいたことがありましたが、そこの奥さんのお供をしてよく二条市場へ買い物に行きました。魚の切り身やしじみ貝などを買うと、うすかわでくるりと三角形に包んでくれます。見ると、どこの店先にもうすかわがうず高くつんでいました。昔の人は、人体には無害で公害など起こしそうにもないようなものを利用していたんですね。たまにお菓子屋さんでうすかわなんかを見ると、ほんとに懐かしくなってしまいます。今は便利な石油製品のものにとって代わられてしまいましたが、やはり木にはなんとなく親しみがあるのか、木製品に見せかけた容器が目につきます。また、笹や木の葉に似せたビニール製品が当たり前のようになってしまっては、やはりちょっと寂しいですね。現在はあまりにもにせもの？　が多い困った時代です。これでは風味もなにもないですよね。

子どものとき、まんじゅうにくっついているうすかわをなめって笑われたことがありましたが、そのときのまんじゅうの皮の味、うすかわの木の香りを思い出しながら書いてみました。

（古平町大字浜町　在住）

◇　◇　◇

苦難を乗り越えて
―今思い出すこと―

渡辺ハツエ

人生長くなるにつれ、悲喜こもごもの思い出はつもるものと思われます。この秋も私にとっては忌まわしい、あの大時化の時の漁具の惨害が脳裏をよぎります。

かえりみるに昭和六十三年十月二十八日、大型台風に襲われ漁業の町古平も、沿岸漁業に大きな痛手を受けました。

当時、亡夫は一トンに満たない船外機付きの小舟で、タコ漁を営んでおりました。待望のタコ漁が始まり、タコ箱を同業者といっょに漁場に仕掛ける仕事も無事に終わって、豊漁を祈りながらさてこれからという時に時化に襲われたのでした。まるで悪夢を見ているようでした。まだ時化もおさまらないうちに漁場を見回りに行った主人が、小舟に積んで来た漁具の惨状を見てただ唖然としてしまいました。こんな状態になってしまった漁具を舟に引き揚げるのも大変だったろうと、胸中、主人の労苦を心からねぎらいました。

⇦（次ページ下段へ続く）

遥かなる故郷の思い出 [38]

痛恨！戦友松岡外与造さんの戦死 ②

橘　義春

私はラッパ手、松岡さんは衛生兵で、軍隊の勤務は二人とも比較的楽？　な方だったので、わりと会う機会もあってなんとなく気の合う戦友だった。

軍隊生活も足掛け三年目に入った年の運命の昭和二十年八月九日、突如、ソ連軍が国境を突破して侵攻して来たのである。ソ連とは不可侵条約を締結しているのになぜ、とわが耳を疑ったが、これが現実だった。

侵攻して来たソ連軍の主力は第五十六狙撃軍団二万人、戦車一個旅団、独立戦車軍団二個大隊の機械化部隊五千人、合わせて二万五千人という大部隊で、ヨーロッパでドイツ軍と戦った近代装備の、戦いなれた歴戦の精鋭部隊であった。

一方、これに対してわが軍の総兵力は三千五百人で、飛行機や戦車部隊の支援もないというおよそ近代戦とはほど遠いもので、剣付き小銃と大和魂だけが頼りというものであった。このまま強大なソ連軍が怒濤のように進撃して来たら、樺太の島民四十万人はたちまちキャタピラに踏みつぶされてしまうことだろう。島民の犠牲を少なくし、一人でも多く北海道に脱出させるため、矢面に立ってソ連軍と戦うのがわれわれの重要な任務であった。

八月九日のこの日、私と松岡さんは、上敷香町の西方五キロの泉部落の山の中で陣地構築をしていた。ところがこの降ってわいたようなソ連軍の侵攻に全軍は戦闘態勢をとり、国境の町である古屯へ土砂降りの中を汽車で進出した。私は大隊本部にラッパ手として配属が決まり、松岡さんは第一中隊の指揮班の衛生兵長として古屯まではいっしょであったが、松岡さんとはここで別れた。

私は中央軍道の神無川陣地に布陣した。松岡さんの第一中隊は連隊本部陣地のある八方山の一角の、私の陣地より二キロほど離れた北極山に布陣した。

八月十六日、松岡さんの第一中隊に「北極山を死守せよ。」という連隊からの命令が出た。この頃から、敵の攻撃が激しくなってきた。敵は空からの機銃掃射と、迫撃砲の集中砲火を浴びせてきたため、死傷者が続出した。この日は、高さ二百メートルほどの北極山をめぐって、敵味方入り乱れての必死の攻防戦となった。砲撃に呼応して、東側の斜面の上からおびただしいソ連兵が自動小銃を乱射しながら接近して来た。それを迎え撃つ第一中隊は斜面を駆け上がろうとしたが、頭上からの敵の激しい銃砲火にはばまれ、敵前十メートルほどの下の沢の中に

（前ページより続く）

これからまた、この仕事を続けて行けるのだろうか。頭の中は不安だけが駆け巡り、私は何も手がつきません。主人は、と見ればただ黙々と傷ついた漁具の整理をしているではありませんか。こんなことに負けてはいられない。一から出直す「海の男の気合い」を主人の顔から感じました。大漁を祈って、また二人で頑張らなくては――私はだまって手を貸しました。

そんなとき当時の後志支庁長さんから、温情のあふれる激励の見舞状をいただき感泣いたしました。これは、私が北海タイムスの『女性の窓』に投稿したのを、支庁長さんが読んで下さったことによるものです。

九年前の忘れることのできない悲しいできごと、改めて心静かに瞑想にふけっております。

（古平町大字御崎町　在住）

◆　◆　◆

身をひそめて攻撃の機会をうかがっていた。　―つづく―

（古平町出身・現在東京都小金井市東町　在住）

岬短歌会詠草

家族にて運河の街にゆき積丹のふじ寿司支店ののれん潜りぬ　竹内コト

本州より見える布教師を持て成すと献立を組むお年齢(とし)も考えて　鈴木時子

台風に散りし木の葉は彩なして朝の舗道に張り絵のごとし　榊佳代

橋に佇ち人にまじりてのぞき見る河面に鮭のそ上し来るを　東美知

さまざまな豆にて作られし小鳥たち作りし君の心宿りて　田中香苗

刺身用と言かれし箱の水氷に泳ぐ如き秋刀魚子より届きぬ　堀典子

百合園にてと君が送りくれし写真見れば昔学びし友らなつかし　池田てる

沖向きて礁に数羽の海鵜居り羽いっぱい広げるが見ゆ　丹後初江

手の平に茶碗の温もり感じつつなげきて暗きニュースを聞きぬ　水口キエ

帰港する船は大漁その船の周りを賑やかにゴメらは飛べり　越田由起子

立岩に葉の落ちし潅木ボワボワと毛の生えるるが如し　堀昭子

向か家に遊びに来たる猫三匹長幼の序あり食事おとなし　長崎フエ

伝説のピリカメノコの悲恋ありし積丹原野にサビタの花咲く　山口スエ

古平ホトトギス会

古平と積丹つなぐ時雨虹　斉藤波留

月影にある波音の渚かな　越野清治

ウニ漁に大事な道具箱眼鏡　大和田絵伊

素裸の卒寿健康木太刀振り　水見句丈

退院の祝の膳や鮭料理　大島喜恵

山車の数少なくなりし秋祭り　山口浪

漁火の消え波音の明け易し　仲谷美砂

紫陽花の彩の替りし雨の朝　木村芳園

病みてより夫に看取られ木の葉髪　越野スミ子

天気図に台風の目二つ現れ　仲谷比呂子

積丹の無人出店の南瓜手に　福井幸平

寝ずに描く祈願達磨の夜長かな　越野敏雄

日々老いし祖母に早目の秋暖炉　仲谷安代

ゴリに続いてゴダッペのこと

福井幸平

普通の辞典を見てもゴダッペはなかったが、ある時、漁業生物図鑑でようやくゴダッペ、即ちコマイ（氷下魚）の幼名だと解り、カンカイ・オオマイと名前がかわりタラの仲間とある。

子どもの頃、ゴリといっしょに川でゴダッペを獲って遊んだ思い出や、釣りの餌にしてたこともある。体長四～六㎝ぐらいまでがゴダッペと呼ぶようで、一年で二十㎝ぐらい、二年目で二十五～三十㎝の成魚となるらしい。ゴリと違ってゴダッペは食べたことはなかった。

役立たずのことをゴダッペ野郎と悪い言葉に使われていた。まぁ手拭いで獲ることの遊びがおもしろかったが、ゴリのように食べたり利用価値があまりなかった。ただこれが成魚になって、あのおいしいコマイになるとは知らなかった。コマイの干魚はおつまみとして、さっぱりしたくせのない味が今でも好きな干物である。ルイベとか刺し身としては知らない。

× × ×

前に書いたゴリについて、書き忘れたことがあったので追記します。

金沢のゴリ料理は有名で「まごり」と称する「かじか」を用いたものを主とし、みそ仕立てのゴリ汁はその代表です。空揚げ、天ぷら、佃煮などにもなっ

秋うららパークゴルフに今夢中　長谷川和子

夕焼けの海に国境なかりけり　岩瀬みのる

・そんだ、そんだそんだ＝そうだ、そうだそうだ
・そんだすけ＝そうだから、それだから
・たがらもん＝働きたがらない者をばかにする
「あれ（あいつ）いいたがらもんだ」
・たかる＝恐喝をする、ねだる、寄り集まる
・たかじょう（高丈）＝地下たび
・たぐらんけ＝ばか者
「えーこの たぐらんけ！」
・たげぇ＝（値段が、背が）高い
・たぢぶるまい＝送別会、嫁さんの家での祝い
・たな＝赤ん坊を背負うときの帯

古平の方言

・たなぐ＝持つ、持ち上げる
・だはんこぎ＝駄々をこねる、無理をいう
「ずんぶだはんこぐあが（赤ん坊）だ」
・～だべサ＝～でしょう、～だろう
「ンだべサ」「そんだべサ」
・だぼら＝ほら、大げさ、無駄ばなし
「あいついっつもだぼらふいでるナ」
・だまがす＝だます、うそを言う
・たまげだ＝驚いた、びっくりした
・たもずかる＝（何かに）つかまる、頼る
・たんぱら＝短気、怒りっぽい
・ちしご＝鰊漁場で潮の流れを知る方法、それ

によって鰊の群来を予知する
・ちち（ちっち）＝おかあさん
・ちっちゃこい、ちゃっこい＝小さい
・ちゃんけ＝小さい、小さいことをばかにする
・ちゃんちゃん、ちゃんちゃんこ＝袖無し
・ちゅうき（ちゅうぎ）＝中風（ちゅうぶう）、神経がマヒする症状
・ちゅうはん＝（昼飯）昼ご飯
・ちょこ（ご）っと＝ちょっと、わずか、少し
・ちょっこし＝わずか（の間）、少し
・ちょこまか＝せかせかと、ちょろちょろ
・ちょす＝いじる、触る、冷やかす
「少し ちょして（冷やかす）やるが
・ちょっかい（する、出す）＝よけいな手出しや口出し（をする）、からかう
・ちょっぺ＝つげ口、口がかるい、人のことをとやかく言う
・ちょべっと＝ほんの少し、わずか
・ちょろい＝たやすい、かんたん、問題にならない、相手にならない
・ちょろまかす＝ごまかす、無断で持ち出す
・つっぺ（とっぺ）＝栓、ふさぐ
・つぼ（坪）＝（木を植えた）中庭
・つまご＝わらで作ったサンダルのような履物
・つらつけねェ＝あつかましい、図々しい、恥知らず、自分だけ得するようなことをする
・てき（てぎ）＝彼、あいつ、相手を軽くいう

ています。

ごりとりし渚も今は海深く

× × ×

氷下魚（コマイ）

歳時記には、鱈に似た長さ二十～四十㎝の魚で北海道で獲れ味は淡泊である。凍った海に穴をあけて釣ったり網を入れて獲るようで、テレビでもよく見かける風景である。

田舎町での夏はともかく海か川で遊ぶことが多いので、ゴダッペ獲りもなにか懐かしい思い出がある。今はどうか知らないが、古平川の夏はゴリ・ゴダッペ・毛ガニ・テングサ・モゾクなどなど、それに橋の上からの飛び込み練習を繰り返したり楽しかった。

テレビがないから今思うとまことに健康的で、遊ぶ教材がすべて自然が対象で、幼年の発育成長にも良かったように思われるが、どうでしょう？

遠い日のゴダッペ獲りし夏も過ぎ